



高瀬藩邸跡に残る町割り

～突貫工事で整備された町並み～

江戸に創設されていた熊本藩の支藩肥後新田藩は、明治維新の混乱を避けて、10代藩主細川利永が高瀬へ移住することになりました。その後、高瀬藩と呼ばれるようになり、藩邸の建設地が玉名市岩崎に決定されると、家臣の武家屋敷群が整備されていきました。明治3（1870）年5月から家臣らの居住が始まり、玉名へ江戸文化をもたらしました。しかし同年9月、藩主が居住する藩邸は完成をみないまま、高瀬藩は解体されました。それでも当時の町割りは現在でもよく残っています。

■最後の高瀬藩・武家屋敷

～九曜文鬼瓦が語るもの～

中心部にある藩邸を囲むように武家屋敷群が建設されましたが、時代の流れと共に解体されていきました。そして、最後の武家屋敷といわれていた建物も、事前調査が実施された後、残念ながら令和3年に解体されました。屋根にあった九曜文がある鬼瓦は保存されています。



往時の鬼瓦



最後の高瀬藩武家屋敷（解体前）

屋根に置かれていた輪九曜文鬼瓦は2点あり、その他に烏袷^{くろあじ}2点、目板瓦7点などの合計13点の瓦は撤去した後に市博物館へ寄贈されました。

目板瓦の中には「金七」といった刻印があるものが含まれており、類例から益城町で焼かれた土山瓦^{つちやまかわ}であると考えられています。しかし、当時の武家屋敷のほとんどが茅葺きであったことから、これらの瓦は本来、藩邸の屋根に置かれていた可能性もあります。いずれにしても、高瀬藩邸に残された数少ない貴重な資料であることには違いありません。



輪九曜文鬼瓦

（江戸時代末期～明治時代初期）



武家屋敷の内部（座敷）



井戸跡

■ 武家屋敷群の調査

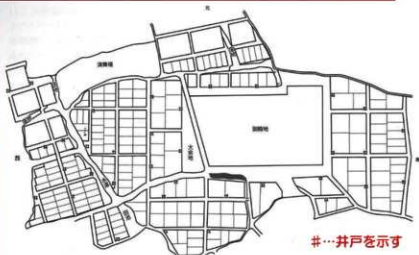
～今に残る当時の町割りと井戸～

右図は、明治2年に描かれた『高瀬藩図』を180度回転させて製図したものです。下図が現況図でいかに当時の町割りが残っているかわかります。藩邸跡は現在、玉名町小学校・玉名女子高等学校の敷地となっています。絵図には、井戸の印が描かれており、現在も数基が住宅内に残っています。

建物の建て替えが行われる時点で、状況に応じて確認調査を実施していますが、これまでキセルが出土したり、井戸跡が検出されています。

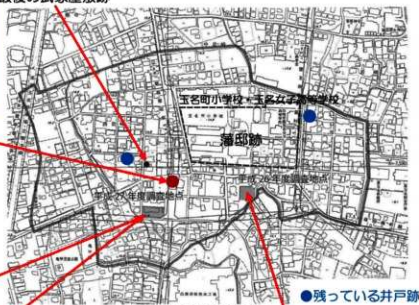
平成26年度の調査地点は、高瀬藩家老屋敷跡(旧米野邸)とされ井戸が完全に残存していました。

平成27年と令和2年度に実施した調査では、武家屋敷跡の廃棄土坑から近世以降の陶磁器などが出土し、付近から醤油壺が底を据えたような状態で検出されました。また、全体的に幕末から明治初期にかけて造成された時の整地層が確認できます。



『高瀬藩図』(明治2年)

最後の武家屋敷跡



キセル出土

◀ 廃棄土坑
井戸跡の近くで
検出された当時
のごみ穴です。

現在の高瀬藩邸跡周辺



出土した醤油壺



出土した井戸跡
(地下に保存)



家老屋敷跡の
井戸跡

井戸枠は、凝灰岩製で円形に加工した石材をきれいに積み上げたもので、約5m下に水位がありました。井戸は共同で使用され、階級によって5～10軒に1基ずつ配置されていたようです。絵図には井戸の印がない地点にも存在するところがありますが、後世に追加された可能性があります。



高瀬藩邸跡周辺の景観